

中世後期の京都今宮祭と上京氏子区域の変遷

—そこに顕現する空間構造に着目して—

本 多 健 一

- I. はじめに
- II. 今宮社・今宮祭と西陣
 - (1) 室町期までの今宮社・今宮祭の変遷
 - (2) 西陣の地域概観
- III. 近世の今宮祭と祭礼時の空間構造
 - (1) 近世今宮祭の概要
 - (2) 今宮祭の巡幸路
 - (3) 剣鉾の格式をめぐる問題
 - (4) 近世今宮祭に顕現する空間構造
- IV. 中世後期の今宮祭
 - (1) 今宮社氏子区域の成立
 - (2) 乱後の今宮祭の復興とその背景
 - (3) 巡幸路の確立過程
 - (4) 今宮祭の担い手とその変遷
- V. 中世後期の今宮社氏子区域
 - (1) 戦国期大宮・小川地区の状況
 - (2) 戦国期千本地区の状況
 - (3) 室町期の氏子区域と剣鉾の新調時期
 - (4) 中近世移行期における祭礼時の空間構造の確立
- VI. おわりに

I. はじめに

古代から中世に至る京都において、一般の住民に支えられる都市祭礼のあり方は、その長い歴史を背景に多くの研究の蓄積がなされている。まず平安期から鎌倉初期にかけては、平安京南部の住民を担い手として、郊外

の本社から神の乗った神輿を市街地の御旅所に迎えるという形式での、都市祭礼の成立と実態が明らかにされた。主要研究を列举すれば、祇園・稲荷・松尾などの祭礼を中心に五島邦治¹⁾、黒田一充²⁾、福原敏男³⁾、岡田荘司⁴⁾の包括的研究があり、個別では稲荷祭について近藤喜博⁵⁾、関口力⁶⁾、松尾祭について松原誠司⁷⁾などの研究がある。この他にユニークな視点として、都市祭礼の季節性と自然災害との関連を追究した片平博文⁸⁾の成果も注目される。

続く中世の祭礼では、祇園会の研究が質量ともに他を圧倒しているといってよい。特に先駆的研究者である林屋辰三郎⁹⁾が、山鉾巡行の成立発展に京都の都市共同体の歴史を見出すという基本的方向性を打ち出したこともあり、文化史あるいは歴史民俗誌の枠を越えて、当時の政治・経済・社会の状況と関連づけた優れた論考がなされている。主要なものだけに限っても、歴史学における脇田晴子¹⁰⁾、瀬田勝哉¹¹⁾、川嶋將生¹²⁾、河内将芳¹³⁾、芸能史における山路興造¹⁴⁾、美術史における亀井若菜¹⁵⁾の研究など枚挙に暇がない。次いで多いのは稲荷祭であり、祭礼課役の問題を中心にして小島鉦作¹⁶⁾、宇津純¹⁷⁾、馬田綾子¹⁸⁾、橋本初子¹⁹⁾らの成果がある。他には西ノ京北野祭と室町幕府との関係を明らかにした三枝暁子²⁰⁾の論考もある。

この中でも新しい祭礼研究の切り口として

キーワード：今宮祭、中世後期、京都上京、氏子区域、空間構造

注目されるのは、河内の論考²¹⁾であろう。それは、中世祇園会が執り行われる地域（氏子区域）に現れた、特殊な空間のあり方に焦点をあてたものであり、神輿渡御ルートをめぐる現実の都市空間と人々が認識していた都市空間とに乖離があり、しかも神輿渡御がその乖離を可視化するとした。これは現実の空間と、同時代の住民や社会集団によって認識された空間とを区分して論じ、その相互関係を問う歴史地理学の基本的アプローチを都市祭礼に応用したものといえる。

歴史地理学において現実と認識との乖離を対象とした研究は、中世都市における現実の空間構造と領主権力の空間認識とを論じた山村亜希²²⁾の論考などがあるが、この場合の空間構造とは、「地形、街路・街区の形態的特徴とそれら相互の関係、都市内部における諸施設・諸機能の分布とそれらの有機的結合関係の復原を行い、そこに空間的パターンを見出すことによって、それぞれの都市の空間構造を析出する」²³⁾とあるように、もっぱら地表面の有形物が組織化ないし結合されている都市空間のあり方であった。しかし都市空間とは、有形物ばかりでなく、そこに在住する住民や社会集団などが組織化され、結合されることによっても構成されていると考えられる。それゆえこれらをあわせて、都市空間の全体像を把握すべきであろう。本稿では特に後者に焦点をあて、住民や社会集団、およびそれらの在住する地域が有機的に組織化ないし結合されているあり方を「空間構造」と定義し、中近世都市の祭礼時に現れる空間構造を問題とする。なぜならば、祭礼というハレの日だけに、それに係わる地域に顕現する空間構造は、しばしば日常（ケ）のそれと異なる場合があり、したがって祭礼時には、住民や社会集団が現実とは異なる認識を共有していたと考えられるからである。

もちろん祭礼時に現れる空間構造が、日常のそれを反映している場合もあり、このため

祭礼の考察を通じて、それが執り行われる都市の内部構造やその変遷を明らかにしようとする研究も多い²⁴⁾。しかし、このような立場は、祭礼時に顕現する複雑な空間構造の一側面しかみていないのではないだろうか。問題は、祭礼時の空間構造と日常のそれとが時に一致し、時に乖離するという錯綜した関係の実態について、これまでその解明はおろか把握さえ十分になされていないことであろう²⁵⁾。

このように祭礼時の空間構造は、歴史地理学においてきわめて重要なテーマでありながら、河内のような視点からの研究は端緒にいたばかりといえる。河内の論考にしても、例えば現実と認識との乖離が形成されたプロセスの解明などは未解決のままであり、今後は既存祭礼研究の成果を踏まえた事例の積み重ねが求められよう。

本稿の目的は、以上のような問題意識を背景に、中世後期、特に16世紀戦国期の京都上京を氏子区域として執り行われた今宮祭を対象とし、そのあり方と変遷を可能な範囲で復原する。さらに歴史地理学の立場から、祭礼の日に氏子区域が分節され、それらの間に特徴的な空間構造、具体的には個別町間ないし町グループ（例えば町組）間に序列・協力・対抗といった関係が現れる問題を摘出する²⁶⁾。そしてこれらと氏子区域のあり方、特にその市街地形成とがいかなる関係にあったかという検討を通じて、現実と認識とが乖離するような、祭礼時に顕現する空間構造の特徴解明をめざすものである。

ところが、対象を中世の京都に絞って既存研究を改めて見直してみると、深刻な問題に気づく。すなわち南部下京以外の住民に支えられてきた他祭礼の研究が、これまできわめて貧弱であったという問題である。特に下京と並ぶ北部の市街地、上京の今宮祭や御霊祭については、概論的な説明以外に研究が試みられていない。

この現状は、祭礼という文化現象を素材に

して京都という地域を研究の俎上にのせようとする場合、たいへん偏った状況にあるといわざるをえない。山田邦和は、京都の内部にあっては現代でも「中世に起因する地域差が脈々と受け継がれて」いて、それが祭礼を通じて顕現することを示唆しており²⁷⁾、したがってこのような地域の構造を明らかにしようとする場合、下京の祇園会や稻荷祭ばかりでなく、上京の今宮祭や御霊祭もあわせて総合的に研究対象とすべき必要性が以前から指摘されながら²⁸⁾、現実にはまったく手つかずの状態にあるからである。

もちろんこれには理由があり、最大の問題は良質でまとまった史料の絶対的な不足にある。本稿が事例とする今宮祭についていえば、中世におけるその記録は断片的なものばかりであり、執り行われた神事や演じられた芸能の形態・機能、神輿などの祭具や担い手たちのあり方、祭礼の維持運営システムやその経済・社会的基盤といったことがよくわからない。執行の記録そのものは多数に及ぶだけに、それらが祭礼の具体的な様相を伝えず、明確な像を結ばないという現実、まさに隔靴搔痒の感がある。

それゆえ今宮祭の研究は、全ての時代を見渡したとしても、きわめて乏しい。平安期において都市祭礼とは別に郊外で執り行われた御霊会という特徴を指摘した五島²⁹⁾、近世の祭礼の様相を明らかにした坂本博司³⁰⁾、同じく近世の巡幸路を中心とする問題を扱った村山弘太郎³¹⁾、近世末の駕輿丁の問題を報告した小林丈広³²⁾の成果などにとどまっており、中世のあり方を正面からとりあげた論考は皆無であった³³⁾。

しかし断片的であっても、史料を丹念に収集・分析し、さらに新しい視点からの方法も導入して検討してゆけば、おぼろげながら中世における今宮祭の様相が見えてくるのではないだろうか。本稿が、今宮祭の復原にあたって依拠するのは、主として同時代の古記

録や古文書、例えば公家の日記類などである。しかし、これらだけでは限界があることも踏まえて、さらに三つの方法を重視して作業を取り進める。一つは比較的史料が豊富で、研究も進んでいる近世の今宮祭のあり方と問題点を把握した上で、それらがいつ頃までさかのぼるのか考察してゆく方法、二つめは当時の他祭礼、特に氏子区域が隣接する御霊祭、祇園会、北野祭などの動向と比較考察してゆく方法、最後は足利健亮³⁴⁾、高橋康夫³⁵⁾、杉森哲也³⁶⁾らによって研究が積み重ねられてきた、中近世における上京地域の市街地形成プロセスと今宮祭の変遷とを有機的に関連づけてみる方法である。以上のように新しい視点からの方法も導入することによって、本稿の目的とする、当時の今宮祭とその際に顕現する空間構造の復原・考察を、複眼的に進めていきたい。

II. 今宮社・今宮祭と西陣

(1) 室町期までの今宮社・今宮祭の変遷

今宮社（今宮神社）は京都市北区紫野今宮町に位置する。現在の祭神は大己貴命・事代主命・奇稻田姫命である。『日本紀略』によれば、正暦5（994）年、都に疫病が流行したことから船岡山で民衆主導の御霊会が修され、さらに長保3（1001）年にも疫病が流行したため、紫野に社殿と神輿が造られてこれを今宮と号したという³⁷⁾。以上が今宮社および紫野御霊会（後の今宮祭）の成立と考えられている。すなわち今宮祭は、他の京都の都市祭礼と同じく、災厄忌避を祈願する行事として始まったのである。

平安期から鎌倉期にかけての今宮祭は、もっぱら官祭として執り行われており³⁸⁾、そのあり方は、『年中行事絵巻』巻12によれば、のどかな田園に囲まれた社殿前で行われる祭のようであった³⁹⁾。五島が「郊外の御霊会」⁴⁰⁾と表現したこの祭が、都市に集住する一般住民に支えられた都市祭礼の様相を見せ

始めるのは、14世紀の後半、南北朝期から室町期にかけてである。具体的には貞治6(1367)年に神輿の神幸が⁴¹⁾、応永8(1401)年に御旅所や神輿造替にかかわる洛中地口銭の存在が⁴²⁾、それぞれ初めて確認される。すなわちこの頃には、神輿を郊外の本社から市街地の御旅所に迎えるという形態が成立していたのであろう。

しかし同様の形態が、祇園・稲荷・松尾の三祭礼では平安末期に、御霊祭では鎌倉初期に成立していたことに比べると、やや遅い時代の成立といえる。今宮祭の都市祭礼としての確立の遅れは、その担い手である都市住民の集住過程と関連があり、平安京の南部(後の下京)と北部(後の上京)、さらには北部のうちでもおおむね堀川をはさんで東部と西部(後の西陣など)の市街地形成の違いとも関係づけられよう。

(2) 西陣の地域概観

近世今宮社の氏子区域は、享保2(1717)年頃にまとめられた『京都御役所向大概覚書』(以下『覚書』)によれば、「東ハ西堀川限、但一條より北ハ小川通之西側限、西ハ七本松通限、南ハ二條御城番北之方御役屋敷迄、北ハ千束村上限」⁴³⁾であり、東側の御霊社(上御霊神社)および西側の北野社(北野天満宮)の氏子区域と隣接しあっていた(図1)。

これらのうち南半分が上京の西部であり、その大部分を占めているのが西陣である。『覚書』によれば、西陣の範囲は「東ハ堀川を限り、西ハ北野七本松を限り、北ハ大徳寺今宮旅所限り、南ハ一條限り、又ハ中立売通町数百六拾八町」⁴⁴⁾とある。これはおおむね文政3(1820)年の「上古京拾貳組并枝町新町離町門前境内組々銘町名軒役附」⁴⁵⁾で示される上西陣組古町83町と下西陣組古町80町の範囲を指しているが、近世西陣の町組は、さらに南方の上西陣組新町52町と下西陣組その他4町を加えた合計219町から成っており、こ

れら全域が今宮社氏子区域に含まれる。寛永15(1638)年には、上西陣組と下西陣組がそれ以前の西陣組から分裂しているが、後述するように今宮祭の維持運営は両組の古町によって担われており、祭礼に関する限り両者は一心同体と考えてよい。したがって、本稿では両者をあわせて「西陣古町」と称し、一体の地域として取り扱う。

西陣の名は、応仁の乱(1467~1477)において、山名宗全ら西軍が陣を構えたことに由来する。その主産業である西陣織は、平安京の大宮東・土御門南(現在の^{おおとのい}上京区黒門通上長者町近辺)に位置していた織部司とそれに所属していた織手たちに淵源があるといわれる。その後、彼らは壬生東・土御門北(現在の^{おおとのい}上京区智恵光院通上長者町近辺)の大宿直の地に集住して、織物業を中心とする繁華な

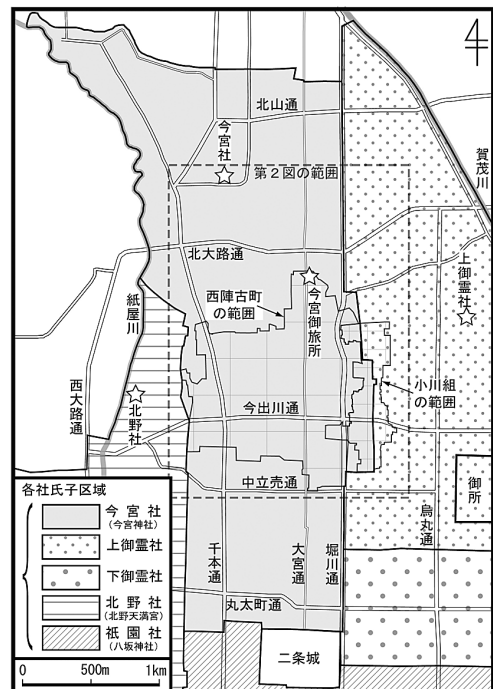


図1 近世今宮社氏子区域とその周辺

出所：1/25,000地形図を基図として各種資料より筆者作製。

注：道路は現在のもの。氏子区域の境界が不明な部分は、現代の神輿巡幸路などから推定。

市街地を形成していたが、応仁の乱で離散を余儀なくされた。そして乱後の明応年間(1492～1500)に戻ってきた場所が西陣であったことから、そこが16世紀以降に手工業地域として発達したと考えられている⁴⁶⁾。

16世紀後半の安土桃山期における西陣町組

の形成過程を明らかにしたのが杉森であり、その概略は次のようになる(図2)⁴⁷⁾。元亀3(1572)年の「上下京御膳方御月賄米寄帳」(以下「寄帳」)⁴⁸⁾によれば、④当時の西陣、川ヨリ西組を構成していた町は24町(文政3年段階換算で29町、以下同じ)であった。さら

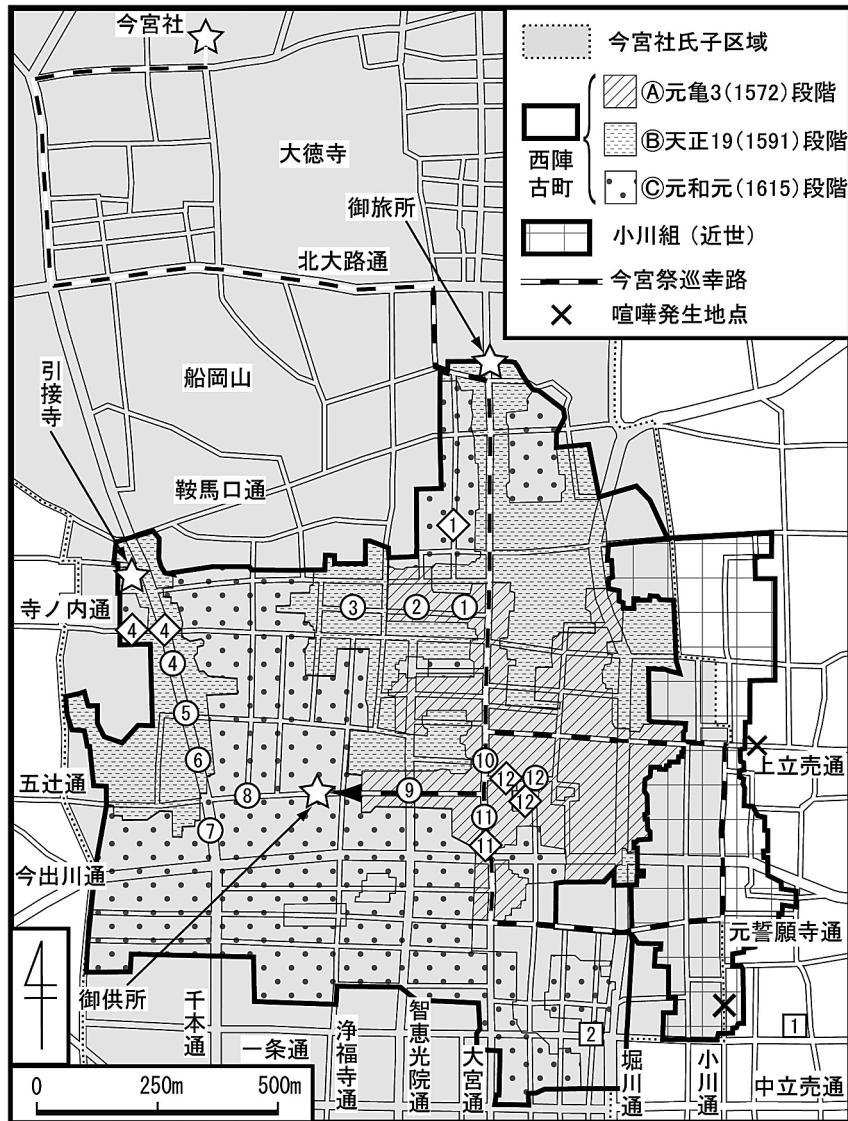


図2 中近世の今宮祭関係図

出所：杉森哲也1983、村山弘太郎2006所収地図を参考に各種資料より筆者作製。

注：○数字は鉾町を表し、表1の番号と対応。◇数字は鉾町に対応した寄町。

□数字は本文IV (1) 参照。道路は現在のもの。

に「新町御地子御赦免之帳」、元和元（1615）年および「西陣四千貫文借帳」、寛永3（1626）年^{49）}を分析すれば、西陣の町組において、③天正19（1591）年までに成立した33町（39町）、④元和元年までに成立した77町（77町）が特定出来る。これに加え、寛永年間頃までには成立した残り18町が西陣古町を構成した。その結果、大宮通を中心として、西陣機業の中枢を担う御寮織物司・分糸屋などが集積する④（以下「大宮地区」と称す）が最初にあり、次いでその北側と少し離れた千本通沿いに③が拡大、さらに両者の間の広い地域に④が成立するという西陣町組の形成過程が明らかになった。

Ⅲ. 近世の今宮祭と祭礼時の空間構造

（1）近世今宮祭の概要

各種古文書や地誌、名所案内記などによれば、近世今宮祭の概要は以下の通りである。すなわち5月7日に剣鉾（後述）などに供奉された神輿三基が、今宮社から御旅所（現上京区若宮横町および若宮堅町）に神幸し、8日間駐輦、その後15日には御旅所から氏子区域を巡り、御供所（現上京区一色町）での神事を経て、今宮社に還幸するというものであった。当時は西陣の発展に加えて、徳川綱吉の母である桂昌院の保護もあり^{50）}、盛況をきわめたという。ただし、還幸日が15日に変更されたのは慶長12（1607）年頃からであり、それ以前は5月9日であった^{51）}。

先行研究によれば、今宮祭では剣鉾を出す鉾町、鉾町を助ける寄町、御旅所・御供所の所在町、それに持ち回りで祭全般の運営を執り行う行事町がすべて西陣古町で構成されていた。この体制は、行事町を務める順番を定めた『古久保家文書』『西陣旧記録』が寛文12（1672）年および元禄4（1691）年に記されていることから、17世紀後半までには固まり、江戸期を通じて変わることがなかった^{52）}。すなわち近世の今宮祭とは、イコール西陣古

町が維持運営する祭礼であったといえる。

（2）今宮祭の巡幸路

次いで神輿の巡幸路については、『覚書』によれば、「五月七日御出之節神輿三基本社より西江、千本通筋南江、大徳寺南之道を東江、大宮通筋所江神幸、同月十五日祭礼之節大宮通（筆者注・ママ）西江、大宮北江、五辻ヲ西へ、浄福寺西江入ル町二而御供を備へ、夫より五辻東江、大宮北へ野江出、大徳寺南之道を西江、千本通筋北江、本社江帰座」^{53）}とある。

この記述だけではいささか不明な部分があるため、さらに延宝4（1676）年の『日次紀事』5月15日条「神幸出_二小河通_一自_二舊誓願寺通_一過_二大宮通_一歴_二船岡山北麓_一入_二本山_一」^{54）}の記述で補い、一部推定も含めて復原した巡幸路を図2に示した。すると17世紀江戸初期の巡幸路は、大宮通を中心に上立売通・小川通・元誓願寺通・五辻通で組み立てられていることがわかる。この巡幸路は近世氏子区域の最東部を巡るルートであり、先に指摘した西陣で最も古く町組が形成されたと思われる大宮地区の町々、およびその東側で、既に天文年間には町組の成立が確認される小川地区^{55）}の一部と重なっている。

なお、その後西陣の市街地は、かつての内野、すなわち聚楽第の跡にあたる一条以南の地域に拡大し（上西陣組新町など）、氏子区域も広がったが^{56）}、巡幸路は19世紀に至っても変更されることはなかった^{57）}。

（3）剣鉾の格式をめぐる問題

剣鉾とは剣の形をした鉾であり、京都の祭礼特有の祭具である。その役割は巡幸列の先頭にあつて悪霊を払い、神輿を誘導するものとされる^{58）}。近世今宮祭では西陣古町の12の町（鉾町）が剣鉾を保有し、巡幸に加わっていた（表1・図3）。これらの鉾には、古鉾としての千本鉾（①～⑧）と新鉾としての京

表 1 今宮祭の剣鉾と鉾町一覧

番号	分類	鉾名称	町 名	面する通
①	千本鉾 (古鉾)	扇 鉾	④ 東千本町	(鉾参通)
②		菊 鉾	④ 西千本町	(鉾参通)
③		松 鉾	⑤ 歓喜町	(鉾参通)
④		枇杷鉾	⑤ 花車町	千本通
⑤		柏 鉾	⑤ 作庵町	千本通
⑥		牡丹鉾	⑤ 牡丹鉾町	千本通
⑦		沢瀉鉾	⑥ 上善寺町	千本通
⑧		龍 鉾	⑥ 西五辻東町	五辻通
⑨	京鉾 (新鉾)	剣 鉾	⑥ 五辻町	五辻通
⑩		蓮 鉾	⑥ 芝大宮町	大宮通
⑪		蝶 鉾	⑥ 観世町	大宮通
⑫		葵 鉾	⑥ 東石屋町	石やのずし

出所：各種資料より筆者作成。

注：番号①～⑫および記号④～⑥は図2と対応。

なお、鉾参通は通称。



図 3 現在の剣鉾（扇鉾）

出所：筆者撮影

鉾（⑨～⑫）という2つのグループの区別が厳然としてあり、前者は後者に対して格式という点で優位を占めた⁵⁹⁾。これは千本鉾が京鉾よりも古く成立したからと考えられており、今宮神社でも元禄年間（1688～1704）以前に造られた鉾を千本鉾、それ以後の鉾を京鉾と称するとしている⁶⁰⁾。万治元（1658）年の『洛陽名所集』によれば、今宮社の説明として「祭礼にはたてほこ十二本もたせ産人供奉しける事なり」とあることから⁶¹⁾、剣鉾を出す町は、この頃には定まっていたと考えられよう。

これら鉾町を図2にプロットすると、それぞれのグループが地域的に偏在していることがわかる。京鉾は大宮通と五辻通が交差する地点を中心とする4町であり、千本鉾は京鉾の町の北側に位置する3町と、やや西側の千本通沿いに並んだ5町である。ところが、第Ⅱ章（2）で述べた西陣町組の形成過程が、おおむね市街地の形成を意味するとすれば、奇妙なことに気付く。すなわち千本鉾を出す町々のうち、少なくとも6町（③～⑧）が京鉾を出す町々（⑨～⑫）よりも新しく成立しているのである。町の成立は新しいのに、鉾が古いというのは、明らかに矛盾する。

西陣の市街地形成過程と剣鉾の格式とに「ねじれ」がある問題は、これまで二つの解釈がなされている。まず坂本は、千本鉾を出す地域がもともと氏の氏子区域であり、このうち千本通沿いの町（④～⑧）は古くから市街地として形成されていながら、町組に属していなかったため、元亀3年の「寄帳」には掲載されなかったとした⁶²⁾。この指摘そのものは間違っていない。「寄帳」に載せられている上京の町は合計80町あるが、天文19（1550）年の『言継卿記』は、上京の町数を120としており⁶³⁾、当時の上京では相当数の町が町組に所属していなかったと推測されるからである。しかしそうであるならば、前節で明らかになった今宮祭の巡幸路が、④～⑧の町を経

由しないのはなぜか。しかも還幸に際して、神輿はいったん五辻通を西へ向かいながら、御供所で神事を終えると千本通方向に向かうことなく、また大宮通へと引き返してしまうのである。

一方村山は、千本通沿いの町は後発であったが、先発の大宮通沿いの町に社会・経済的に接近する必要性から、禁裏・公家といった権威を利用して祭礼時の優位性を求めたとする⁶⁴⁾。しかしこの指摘は根拠が不明であり、仮説の域を出ていない。以上のように、剣鉾をめぐる「ねじれ」の問題は、これまで説得力のある説明がなされてはいないのである。

(4) 近世今宮祭に顕現する空間構造

前節までの検討から、近世の今宮祭が執り行われる際、氏子区域の内部はいくつかの地区に分節され、それらの間に三つの特徴的な空間構造、すなわち地区間における序列が顕現するといえる。第一に維持運営を西陣古町が独占していることから、西陣古町のその他地域に対する優位である。第二に神輿が大宮地区と小川地区を中心に巡幸することから、両地区のその他地域に対する優位である。第三に千本鉾が京鉾に対して格式の優位を持つことから、千本鉾を出す町の京鉾を出す町に対する、ひいてはその他地域に対する優位である。

しかし注意したいのは、これらにはいくつか矛盾が含まれている点である。前節で指摘した剣鉾格式をめぐる「ねじれ」はその最たる例だが、他にも神輿巡幸で優位を示す小川地区が、なぜ祭礼の維持運営から除外されているのかといった問題もある。このように祭礼時に現れる複数の空間構造に矛盾が含まれているのは、おそらくそれらが過去からの出来事の積み重ねによって形成されてきたためではないかと考えられよう。

以上を踏まえて、次章以降、中世後期の今宮祭を復原する際のポイントとして、次のよ

うな点をあげておきたい。すなわちまず上京における今宮社などの氏子区域がいつ、いかにして形成されたか、次に神輿巡幸路がいつ、いかにして成立したか、最後に剣鉾、特に千本鉾がいつ、いかにして登場したかの三点である。そしてこれらは、同時期の上京の市街地形成と関連づけて考察してゆくことが不可欠であろう。

IV. 中世後期の今宮祭

(1) 今宮社氏子区域の成立

一般住民が支える都市祭礼としての今宮祭を考えるにあたっては、まず彼らが集住する地域、すなわち今宮社の氏子区域がいかに形成され、それがいかに当時の政治・経済・社会状況とからみあいながら変遷してきたかが問われなければならない。特に前章で指摘した巡幸路や剣鉾格式は、いずれも今宮社の氏子区域という地域の歴史を明らかにしなければ、解くことのできない問題といえる。

「氏子区域」とは、ある神社を氏神（産土神）⁶⁵⁾と仰いで信仰する人々（氏子）が集住する地域であって、ある神社の祭祀を執り行うために、そこに居住する人々に課役が賦課される「祭礼敷地」や、領主が検断権を有して地利を生み出す「所領」とは異なる空間である。先行研究によれば、京都の諸社におけるその形成プロセスは、まず祭礼敷地が設定され、それが住民の氏子意識を醸成して氏子区域を形成したと考えられてきた⁶⁶⁾。

しかしこのプロセスは、比較的早く氏子区域が成立した南部の祇園社や稲荷社などにあてはまるものであり、成立が遅いと思われる北部の今宮社や御霊社でも同様かどうかは検討を要する。なぜならば、この二社に関して祭礼敷地が設定されていたかどうかは判然としないからである。管見の限り、御霊社では明応8(1499)年8月の奥書がある『出雲寺記』に「一、延暦年中遷都之時、弘法東寺、伝教当寺（筆者注・出雲寺）、自四條上下両

社（同・上下御霊社）敷地被定」⁶⁷⁾とある記録のみであり、今宮社では未見である。しかも『出雲寺記』の記述は、内容から判断してそのまま信じられるものではあるまい。このような史料上の制約があるため、本稿では今宮社や御霊社の氏子区域の形成プロセス解明は今後の課題とし、とりあえずこれらの氏子区域が成立した時期の確認にとどめておきたい。

まず、文明18(1486)年に著されたという『兼邦百首歌抄』には、「惣而祇園の社司共、二條の南のかわより五條の北のかわまで、これに生るゝ者を氏子といひ、二條の北のかわより大原口まで、五りやう（筆者注・御霊）の氏子といひ、一條ほり川より西のかたを、今宮の氏子といひ、五條の南のかわより九條まで、この内に生るゝものをいなりの氏子と号する」⁶⁸⁾と記されている。そうだとすれば、当時の京都では上京も含めて近世とほぼ同じ領域で氏子区域が確定していたことになるが、同書を後の偽書とみる説もあり⁶⁹⁾、そのまま信用するのはためらわれる。

しかし、中世後期において上京でも氏子区域が確定していたことを示唆する記録は少なくない。注目されるのは、長享2(1488)年、相国寺鹿苑院蔭涼軒主であった亀泉集証は、足利義政の祈禱にあたり、氏神として御霊神と書くべきところを今宮と書き入れてしまい、義政にその誤りを指摘された出来事である⁷⁰⁾。義政は永享8(1436)年1月2日に赤松伊予守義雅邸で出生しているが⁷¹⁾、同邸は一条通町（新町）の北西にあり（図2中の①）⁷²⁾、そこは確かに近世の御霊社氏子区域に含まれているのである。亀泉集証が間違えたのは、当時の将軍、義尚の氏神が今宮社であったからであるが、彼は寛正6(1465)年11月23日に細川刑部少輔常有邸で出生しており、同邸は一条堀川西側にあった（図2中の②）⁷³⁾。そこが近世今宮社の氏子区域に含まれることも明らかである。

自らの氏神を意識していたのは、公家たちも同様であり、彼らの日記にはしばしば祭礼式日や誕生日に氏神を祀る記事が現れる。特に多いのは御霊社であるが⁷⁴⁾、中には今宮社を氏神とする者もあり、例えば正長元年(1428)生まれである中院通秀は、文明17年5月9日に「早旦参詣今宮旅所、余生神也」⁷⁵⁾と記している。彼らがどこで出生したかは明らかにできないものの、これらの記録は、おそらく当時の公家邸宅が集中する上京の大半が御霊社の氏子区域であり、一部が今宮社の氏子区域であったことの反映とみてさしつかえなからう。そうだとすれば、近世の氏子区域とほぼ同じ地域区分が既に定まっていたということになる。

以上のように、遅くとも室町期には、上京でも今宮社や御霊社の氏子意識が確立しており、それぞれの氏子区域も、近世のそれとほぼ同じ領域で定まっていたと思われる。したがって今宮祭や御霊祭も、この頃に氏子意識を持った一般の住民に支えられる都市祭礼として成立しつつあったと考えられよう。

(2) 乱後の今宮祭の復興とその背景

応仁の乱の影響で京都の祭礼の多くが中止を余儀なくされたが、今宮祭は他の隣接祭礼に先駆けていち早く復興を遂げた。その時期の確定は難しいが、一応神輿の巡幸再開をもって基準とするならば、遅くとも長享3(延徳元、1489)年には復興している⁷⁶⁾。これに対して、御霊祭は明応7年、祇園会は同9年まで再開を待たねばならず、北野祭に至っては神輿巡幸が廃絶してしまった⁷⁷⁾。その後も、今宮祭は天下触穢などで延引されることはあったが、おおむね毎年安定して執り行われている。今宮社は、乱の影響が比較的甚大であった上京が氏子区域であり、文明7年には「仮社」が焼失するという事態にも見舞われながら⁷⁸⁾、このように祭礼の復興が早かったのはなぜであろうか。まずはこの問題

から中世後期今宮祭の変遷を考えてみたい。

祭礼復興が早かった最大の理由として考えられるのは、乱直後から室町幕府の今宮社への後援姿勢が明確になったことではないだろうか。これは先に述べた通り、今宮社が將軍義尚の氏神となっていたためと思われる。その証左として、幕府が諸社に神馬を奉獻した際の送状控である『神馬引付』⁷⁹⁾のうち、年次が連続している戦国初期、文明5年12月19日（義尚が元服し、將軍宣下を受けた日）から明応7年閏10月26日までの25年間を分析してみたい。もちろん幕府による神馬奉獻は『神馬引付』所収分以外にも行われており、今宮社へも室町期から祭礼や若君誕生の折などに多数の神馬が送進されている⁸⁰⁾。しかし『神馬引付』には、それらが他社の分も含めてまとまって所収されているため、当時の幕府神社政策の傾向が反映されているとみてさしつかえないであろう。

表2で示したように、全期間を通して奉獻神馬疋数を集計すると、多い順に石清水八幡、京極寺八幡、春日社、伊勢神宮、今宮社となった。したがって戦国初期の幕府神社政策とは、源氏にゆかりの深い二つの八幡宮を筆頭とし、次いで二十二社制の上七社として朝廷の崇敬も受けていた春日社や伊勢神宮、そして今宮社に重点を置いていたといえる。これだけでも二十二社にさえ含まれていない今宮社が格別な扱いを受けていたことがわかるが、義尚が死去した長享3年3月26日を画期として前後に二分して集計すると、さらに当時の幕府における今宮社の位置づけが明確

になる。すなわち義尚の在位中では、今宮社に奉獻された神馬は春日や伊勢を上回る疋数であったのである。奉獻の事由も、祭礼のほか元服、矢開祝、誕生日など義尚個人にかかわるものが目立ち、いかに將軍の氏神として重視されていたかが理解できよう（表3）。このほか長享元年、今宮社遷宮にあたって幕府が料足を寄進していることなども、今宮社重視策の一環と思われる⁸¹⁾。

以上のように義尚の在位中、幕府は將軍の氏神という理由から、今宮社後援の姿勢を明確にしていた。このような幕府の姿勢が、今宮祭復興をいち早く実現させたとする直接的な証拠はない。しかし、今宮社への神馬奉獻24疋のうち、11疋までが祭礼にかかわるものであったという点には注意すべきである。『神馬引付』において京都の都市祭礼にかかわる奉獻は、他に祇園会の1疋があるのみであり、神輿巡幸の復旧前から繰り返し祭礼時に神馬を奉獻する背後には、当然「祭礼を早く再興せよ」とする幕府の強い意思があったとみるべきであろう。したがって今宮祭早期復興の理由は、第一に幕府の積極的な後援にあったと推測しうるのである。

しかし、今宮社に対する幕府の後援姿勢は、義尚個人との関係に負っていたがゆえに、義尚が夭折した後は格別な扱いは停止されたと思われる。それは『神馬引付』において、義尚の死後に今宮社への神馬の奉獻疋数が激減することからも明らかであろう。そして河内によれば、明応2年に細川政元がクーデターで政治の実権を握ると、幕府の神社政

表2 戦国初期における室町幕府の神馬奉獻

単位：疋

期 間	石清水 八幡	京極寺 八幡	春日社	伊勢 神宮	今宮社	その他	合 計
文明5 (1473)～長享3 (1489)3/26	33	27	16	14	20	48	158
長享3 (1489)3/27～明応7 (1498)	31	8	14	14	4	62	133
全期間合計	64	35	30	28	24	110	291

出所：『神馬引付』より作成。

表3 今宮社への神馬奉獻明細

	年	月日	事 由
1	文明5 (1473)	12/19	義尚元服
2	文明6 (1474)	3/6	(不 明)
3	文明7 (1475)	9/17	義尚参議任官か
4	文明8 (1476)	2/28	義尚矢開祝
5	同 上	5/6	祭 礼
6	文明9 (1477)	5/7	祭 礼
7	同 上	11/23	義尚誕生日
8	文明10 (1478)	3/3	(不 明)
9	同 上	5/7	祭 礼
10	同 上	11/23	義尚誕生日
11	文明11 (1479)	5/7	祭 礼
12	同 上	閏9/23	義尚病平癒祈願
13	文明14 (1482)	11/23	義尚誕生日
14	文明15 (1483)	5/7	祭 礼
15	同 上	10/15	伊達成宗進上
16	文明17 (1485)	5/7	祭 礼
17	文明18 (1486)	5/7	祭 礼
18	長享元 (1487)	5/7	祭 礼
19	同 上	5/28	(不 明)
20	長享2 (1488)	9/27	(不 明)
21	延徳2 (1490)	5/4	祭 礼
22	延徳3 (1491)	5/7	祭 礼
23	明応元 (1492)	1/16	(不 明)
24	同 上	5/3	祭礼か

出所：『神馬引付』より作成。

策は祇園会復興を優先課題とするようになったとみられる⁸²⁾。これらが今宮社にいかなる影響を与えたかはわからないが、諸記録をみる限り、今宮祭はそれ以降も大きな問題なく毎年執り行われている⁸³⁾。したがって明応以降の今宮祭は、おそらく幕府の後援がなくとも、一般の氏子たちに支えられた都市祭礼として、改めて復興を遂げていたといえるのではないだろうか。

(3) 巡幸路の確立過程

次に氏子区域内のどの地域が戦国期の今宮祭を主導したかをみるため、巡幸路の問題を

検討したい。御旅所を中心とする巡幸ルートが重要であるのは、祇園・稲荷・松尾など京都の都市祭礼の多くで、御旅所は祭礼を支える有力な都市住民が集住する地域に設けられ、独自の御旅所神主が祭礼そのものに深くかわり、「神を迎える在地側のセンター」として機能していたからである⁸⁴⁾。

確実に巡幸路を特定できる今宮祭の記録を渉猟してみると、明応6年には「小川辺」⁸⁵⁾で、永正7(1510)年には「室町西大路辺」⁸⁶⁾で、天文7(1538)年には「行願寺前」(現上京区革堂町)⁸⁷⁾で、そして永禄10(1567)年には再び「河堂」(革堂)⁸⁸⁾で、それぞれ駕輿丁をめぐる喧嘩が発生している。また元龜3(1572)年には「小川ノ橋ツメヨリ、御輿一社水中へ入給、御輿散々ニクダケ、軽キ物ハ流ル、金物ハ沈ムヲ取上奉ル」⁸⁹⁾という事件が発生し、天正11(1583)年には「今日今宮祭也、小川之東成氏子祭礼企、興(輿)二千(ママ)余罷出、近代之奇麗之由申之訖」⁹⁰⁾という出来事もあった。これらはいずれも上京の小川近辺であって、17世紀の巡幸路と重なるか、やや外側に外れた地点である。さらに、天正15年の今宮祭を見物した西洞院時慶は、「祭礼、未刻二御渡、予ハ遅シテ漸大宮斗拝也」⁹¹⁾と記しており、大宮通近辺を巡幸していたこともわかる。一方、御旅所のあり方には不明な部分が多いものの、天文年間(1532～1555)には現在の場所に定められたという伝承がある⁹²⁾。以上のような史実や伝承から判断すれば、今宮祭の巡幸路は16世紀前半には固まっており、その後も変化がなかったと思われる。

以上から、16世紀に入った明応年間以降に今宮祭を主導していたのは、祭礼を企画して神輿を自らの土地に招くことのできる地区、すなわち(京鉾を出す町が多い)大宮地区と小川地区であったと考えられる。当然これらが祭礼に伴う諸費用の大部分を負担しており、また負担しうだけの経済力を備えてい

たのであろう。

ただし、現在の御旅所が天文年間に常設されたとすれば、明らかに当時の市街地の外れに設けられており、「在地側のセンター」として機能した形跡もない。つまり、今宮社の御旅所は、従来の御旅所とは別の論理で設けられたらしいことに注意すべきであろう。成立年代が異なるので当然ではあるが、今後はその過程や背景の解明が課題となろう。

(4) 今宮祭の担い手とその変遷

現時点では、戦国期の今宮祭を運営していた組織やその経済・社会的基盤などの詳細は明らかにできない。祭礼費用の調達方法として、馬上役や敷地役のような制度が導入されていたのかも未詳である⁹³⁾。

しかし、明応6年5月の『親長卿記』には、今宮祭の担い手に関して興味深い記述がある⁹⁴⁾。すなわち神幸の7日、小川辺にて雑人と駕輿丁とが喧嘩に及び、死者まで出る事態に至った。よって「打捨神輿於路頭、駕輿丁等退散、仍及晩町人等非分奉舁之、奉入旅所云々」という。駕輿丁が神輿を打ち捨てて退散してしまったので、「町人」らがその分ではないけれども、神輿を昇いで御旅所に入れたというのである。9日にはおそらく前々日の騒動の余波を受けて、「神人等抑留」のため還幸が日没に及んだというから、この「神人」が駕輿丁だったのであろう。

ここで注意すべきは、ともに今宮祭の担い手であったらしい駕輿丁、すなわち神人と「町人」とが、区別して記されている点である。中世京都の祭礼における駕輿丁の実態はよくわからないが、唯一祇園会の大宮神輿を昇いだ今宮神人については、彼らが摂津国今宮村の漁民であり、祇園社神人となって駕輿丁を勤仕した見返りに、京都、特に祇園社氏子区域の下京において、魚物商売に関する特権を獲得していたことが、先行研究で明らかになっている⁹⁵⁾。

摂津今宮神人の事例を、明応6年の今宮祭に敷衍して検討すると、今宮社でも、祇園社と同様に、その氏子区域（特に大宮・小川地区）に何らかの利害関係を有する職業集団（商工座）が神人となっており、彼らが祭礼時に駕輿丁を勤めていたのではないかと推測されよう。これに対して「町人」とは、氏子区域に集住しているものの、特定の職業集団（商工座）には属さない、不特定多数の氏子たちであったと思われる。そして前者が駕輿丁への勤仕を独占的な権利または義務としていたとすれば、戦国初期の今宮祭を主導する担い手は、いくつかの有力な職業集団（商工座）であったと考えられよう⁹⁶⁾。

一方、『兼見卿記』天正11年5月9日条における「今日今宮祭也、小川之東成氏子祭礼企」⁹⁷⁾という記述からは、安土桃山期において、かつては神輿を昇ぐこともできなかった「町人」、すなわち不特定多数の氏子たちが、特定の職業集団にかわって今宮祭運営の主導権を握ったことが推測される。その背後には、当然地縁共同体としての個別町の成熟が想定されるが、これは近世の町に連続する個別町の成立が天文年間頃であったとする最近の中世都市研究成果⁹⁸⁾とも合致する。

以上に加えて祇園会研究の成果なども踏まえれば、16世紀、戦国期から安土桃山期にかけての今宮祭の主たる担い手たちは、祇園会と同様、当初はいくつかの有力な職業集団（商工座）であったものから、地縁共同体（町）において結合された不特定多数の氏子たちへと変化したと推測される。これにともなって、今宮祭も完全に地域と一体になった都市祭礼として定着していったといえよう。

V. 中世後期の今宮社氏子区域

(1) 戦国期大宮・小川地区の状況

ところで本稿が対象とする中世後期、特に戦国期における上京の市街地形成については、都市史などでの研究が大いに進展してい

る。そこで本章では、これら先学の成果を踏まえて、当時の今宮祭を支えた地域と都市住民のあり方を、より細かな地区別に考察し、その中から祭礼時の空間構造が形成されてゆく過程を探ってみたい。

まず明応年間以降の今宮祭を主導したと思われる大宮・小川地区と、そこに居住する都市住民たちのあり方を考える上で注目されるのが、大宮地区に本拠を構えた機業組合、大舎人座の動向である。明応年間までに西陣大宮地区に帰住した織手たちは、まもなく大舎人座を結成し、その後長く京都の機業をリードする存在となるが、乱以前の室町期、彼らが六宿直の地に居住していた頃には、祇園会に神役を勤仕し、鉾も出していたことが知られている⁹⁹⁾。ところが祇園会が再興された明応9(1500)年以降、大舎人座は祇園会への勤仕を一切しなくなった。その状況は、文亀元(1501)年から永正4(1507)年にかけて繰り返し神役勤仕を命ずる「幕府奉行人奉書(案)」¹⁰⁰⁾によって明らかであるが、なぜ大舎人座が勤仕をやめたのかという理由は、管見の限り、これまで明確な説明がなされていない。

脇田は乱の打撃を受けた織手たちが営業の復興に至らなかったのだらうとしているが¹⁰¹⁾、明応9年段階で祇園会再興を急いでいた幕府は、還幸にかかわる経費が不足する場合、後日「大舎人方」から役銭を徴収するように祇園社執行に命じている¹⁰²⁾。この理由はむしろ困窮とは逆で、既に大舎人座の営む商工事業が復興しており、その経済力の大きさが明らかであったからであろう。したがって河内が指摘するように、祇園会が中断している間に「大舎人自身が、祇園会とも、また下辺や在地(筆者注・いずれも当時の下京を指す)とも接点をもたなくなってしまっていた」¹⁰³⁾ことが、真相に近いと考えられる。

大舎人座が祇園会への勤仕を拒んだ理由は、多くの中世商工座が本所と仰いだ山門を

はじめとする寺社勢力の衰えなど、当時の政治・経済・社会状況から多面的に考察してゆかねばならない。しかしその一因として、彼らが西陣に移住し、当地に利害関係を持つようになった結果、今宮社の氏子意識が強まったという可能性も指摘できないであろうか。史料の確認がとれないため推測となるが、先述のとおり今宮祭は、祇園会復興以前から有力な商工座が支える都市祭礼になっていたと思われる。そのような座の一つが、大舎人座であった可能性は十分にありえよう。

機業に限らず、戦国期の大宮・小川地区は、京都でも有数の先進商工業地域であった。それを端的に示すのが酒屋の分布であり、例えば永正12年の「造酒正役権御算用状」¹⁰⁴⁾によれば、両地区ともに10軒前後の酒屋が立地している。高利貸業の土倉を兼業するものが多い酒屋の存在が、その地域の経済力の強さを示していることはいうまでもない。その他の史料からも、16世紀以降、戦国期の大宮・小川地区には稠密な市街地が形成されており、その繁栄は明らかである¹⁰⁵⁾。したがってこの両地区は、ともに都市祭礼としての今宮祭を支える経済・社会的基盤が十分であったといえよう。

(2) 戦国期千本地区の状況

本節では、西陣の中でも千本通沿いに位置する㊸の地区(以下「千本地区」と称す)の状況を考察してゆきたい。なぜなら先述のとおり、近世以降、千本地区の町などが出す千本鉾は、大宮地区の町が出す京鉾に対して格式の優位を誇っており、このような格式の優劣を通じて顕現する空間構造が、中世後期の今宮祭にとってきわめて重要な鍵の一つと考えられるからである。したがって、当時千本地区が千本鉾を新調するなど、大宮・小川地区に伍して今宮祭を主導しえたのかどうか、すなわち両地区に勝るとも劣らない経済力を備えていた地域であったのかどうかを考察し

てゆくこととする。

現在の千本通の一条以北は、葬送地であった蓮台野へのルートとして早くから通じていたらしい。その後、丹波を経て若狭に至る基幹街道として確立し、長坂口に率分関が設けられたことはよく知られている。文安6(宝徳元、1449)年4月の『康富記』によれば、「去十日同十二日大地震之故(筆者注・中略)若狭海道小野長坂之辺、山岸等崩懸、荷負馬多斃死、人亦数多被計(同・打)殺云々」¹⁰⁶⁾とあるので、当時人馬の往来が盛んであったこともわかる。このような街道に沿った中世千本地区の景観を推定できる史料は、第一に「在家」に関する火災の記録であり、第二に当地の引接寺(千本閻魔堂、現上京区閻魔前町)で大念仏狂言や曲舞勸進興行などが催された記録、あるいはそれをめあてに公家らが当地を訪れた記録であろう。中世後期の引接寺は、京都における芸能興行の中心地の一つであり¹⁰⁷⁾、文正元(1466)年の『後法興院記』における「見物雑人四五千計云々」¹⁰⁸⁾という記述や、上杉本『洛中洛外図屏風』上京隻に描かれた景観からもわかるように、興行の催しがある場合、多くの参拝客で賑わった。また、応永31(1424)年の『薩戒記』における「門前在家少々焼亡」¹⁰⁹⁾といった火災記録が多くあるように、引接寺の門前を中心に集落が形成されていた。おそらく当時の千本地区は、基幹街道に沿って門前町的な要素を持った集落の景観を呈していたと思われる。しかしこれだけでは、千本地区の定量的な規模や経済力、あるいは市街地といえる集落であったのかどうかなどは判然としない。

そこで天文15(1546)年の分一徳政令における幕府引付史料¹¹⁰⁾を検討したい。同年の分一徳政令は、一揆によって土倉が掠奪を受ける前に発布されたため、土倉や債務者が幕府に分一銭を納めて債権確認あるいは債務棄破を願い出るに至った結果、その記録が多く残されることとなった。この中には千本地

区の住民が数多く登場しており、彼らの状況を把握することで、同地区の経済力や市街地形成の状態がある程度推察しうるからである。

注目したいのは、同年12月2日付「徳政賦引付」において、「千本三町々人」が連帯して32貫900文の債務棄破を幕府に申請していることである。「千本三町」というからには、当時の千本地区では少なくとも3つの町が形成されており、ある程度市街地的な景観を呈していたとも考えられる。しかしこの場合の町が、経済力という観点からみて、当時の小川地区で形成されていた町と同じように扱えるかという点、必ずしもそうではない。脇田によれば、当時地下人(一般庶民)の連帯による債務棄破の申請は、ほとんどが洛外農民によるものであって、町衆によるものでは、この「千本三町」の他には「鷹司并武衛陣町衆九人」(「別本賦引付二」)の一件に限られる。そしてこの違いは、農村における惣村的結合の強さに対して、都市においては債権者と債務者がともに同じ共同体に含まれていたがゆえの内部矛盾の反映ではないかとしている¹¹¹⁾。逆にいえば、「千本三町」はその内部に債権者が含まれていなかったがゆえに、債務者が連帯しえたといえるのではないだろうか。事実、分一徳政令関係史料における千本地区の住民は、全て小口の債務者として現れ、債権者は皆無である。地下人に対する債権者の大部分は専門業者の土倉であったが、それらが立地していなかったと思われる千本地区は、地域全体としてみるならば、酒屋・土倉が多く分布する大宮・小川地区と比べて、微弱な経済力しか持ちえなかったと推定される。

さらにもう一つ千本地区と大宮・小川両地区との経済力の差を暗示するものとして、享禄から天文年間にかけて、引接寺の勸進所が小川地区の誓願寺門前に設けられていた事実をあげておきたい¹¹²⁾。これは当時の引接寺

が、小川地区を中心とする上京住民の信仰を受けていたとともに、勧進にあたっては（膝下の千本地区ではなく）彼らの経済力をあてにしていたと推察されよう。

以上のように、戦国期において大宮・小川地区と千本地区との経済力の格差は歴然である。今宮祭の問題に戻れば、戦国期、特に巡幸路が確立した16世紀前半以降では、よほどのことがない限り、祭礼を主導し、それだけの経済力も有していた大宮・小川地区の職業集団（商工座）ないし地域共同体（町）が、今宮祭において他の氏子区域の後塵を拝するような新たな格式の導入を許容するはずがないとみなされるのである。

（3）室町期の氏子区域と剣鉾の新調時期

それでは千本鉾の登場とその格式の優位は、応仁の乱以前の15世紀室町期にさかのぼるのであるか。そこで本節では、室町期における大宮・小川・千本各地区の状況と、今宮祭の剣鉾、特に千本鉾の新調時期がいつごろかという問題を検討したい。

しかし結論を先に述べると、室町期にあつては、戦国期のように地区毎の状況を比較できる具体的史料に乏しく、明確な経済格差を見出すことは困難である。ただ、応永33年の「酒屋交名」¹¹³⁾によれば、これらの地区に酒屋がほとんど分布していなかったように、上京の西部、今宮社氏子区域は全般的に京都の他の市街地と比べて開発が遅れていたのは確かであろう¹¹⁴⁾。このように室町期の大宮・小川・千本地区の詳しい状況は明らかでなく、今宮祭の具体的な様相もわからないため、ここでは当面の問題である剣鉾、特に千本鉾の新調時期が室町期までさかのぼれるのかどうかに絞って考察する。

従来の研究では、応永29年の『康富記』に「今宮祭礼也、有鉾」¹¹⁵⁾と記されているため、この頃に剣鉾が祭具として登場していたとする見方が大半であった¹¹⁶⁾。仮に『康富記』

に出てくる鉾が千本鉾であったとすれば、それらは室町期にいち早く新調されて、後発の京鉾に対する格式の優位を確立したということになり、話のつじつまはあう。

しかし、その後の今宮祭の記録には、17世紀半ばまで鉾がまったく現れないことをどう解釈すべきであろうか。管見の限り、実に200年以上も後、慶安元（1648）年の『山之井』の記述、「今宮の祭礼（筆者注・中略）御鉾指渡り、練り物などもあなる」¹¹⁷⁾まで確認できないのである。これは当時の祇園会はもちろん、隣接する御霊祭の記録でも鉾が頻出するのとは好対照であり、不自然な感は免れない。同一筆者の記録として『康富記』を例にとれば、応永8年から康正元（1455）年の間で、今宮祭執行の記述13のうち鉾の記述1に対して、御霊祭執行の記述24のうち鉾の記述13と、格段の相違がある¹¹⁸⁾。これは当時の上京の中でも先進市街地であった東部の御霊社氏子区域と、開発が遅れていた西部の今宮社氏子区域との経済力の格差の反映でもあろう。

次いで近世剣鉾を保有して祭礼に出すのは、あくまで個別町であった点に注意したい。仮に商工業者の分布などからある地区の経済力が盛んであったと推定できても、そこに地縁共同体としての個別町が成熟していなければ、町として剣鉾を新調するという契機はありえないであろう。しかし先に述べたとおり、最近の研究では、近世の町に連続する個別町の成立は天文年間頃と考えられており、開発が遅れていた今宮社氏子区域において、室町期から剣鉾が個別町単位で保有されていたとする見方は無理があるのではないか。加えて京鉾が元禄以降に造られたという伝承も鑑みれば、千本鉾の登場が室町期にまでさかのぼるとは、到底考えられない。

以上のように、応永29年の今宮祭の鉾は、一時的な風流であったか、少なくとも近世以降の剣鉾に引き継がれるものではなかったと

考えられる¹¹⁹⁾。個別町が保有する祭具として、鉦鉦が今宮祭に登場するのは、かなり時代が下るのではないだろうか。

(4) 中近世移行期における祭礼時の空間構造の確立

これまでの考察より、戦国期では神輿を自らの地域に迎えることができた大宮地区や小川地区が今宮祭を主導していたこと、大舎人座や酒屋・土倉など有力な商工業者が集住したこれらの地区は、それだけの経済力を兼ね備えていたこと、対して当時の千本地区は、これらの地区に比肩する経済力は有していなかったことなどが明らかになった。また、室町期の状況は不明な部分が多いものの、少なくとも近世以降に引き継がれるような鉦鉦が登場していた可能性は低い。そうだとすれば千本地区などで千本鉦が新調され、京鉦に対して格式の優位を誇るようになった契機は、一体いつ頃であったのだろうか。

残された可能性としては、16世紀後半によほどのことが生じて、一時的にそれまで今宮祭を主導してきた大宮地区と小川地区が没落し、その間隙を縫って千本地区などの町々が千本鉦を新調して祭礼に参加するようになった結果、この既成事実をもって格式の優位を確立したことが考えられる。

その契機として、筆者は元亀4(天正元、1573)年4月に織田信長によって行われた上京焼討を想定したい。この事件は自然災害や戦乱にともなう類火ではなく、意図的な市街地の破壊行為であるとともに、「きやうちうにはかに大やけにて、かみきやううちになる」¹²⁰⁾、「京中西陣ヨリ放火、足輕以下□□入洛而乱妨、悉放火、自二条上京不残一間焼失了」¹²¹⁾といったように徹底した破壊が行われた。焼討にあった町々は、一時的にせよ没落を余儀なくされており、先行研究ではその結果として上京の錯綜した領主支配が解体されたという指摘もなされている¹²²⁾。実際、

当年の今宮祭と御霊祭は、ともに中止に追い込まれた¹²³⁾。御霊祭は翌々年には復興されているが¹²⁴⁾、今宮祭の復興は天正6年頃まで確認ができず¹²⁵⁾、焼討によって今宮社氏子区域の受けた被害の大きさが推測される。

特に注目すべきは、『兼見卿記』や『永禄以来年代記』によれば、上京の放火が西陣から行われたという点である¹²⁶⁾。当時の西陣とは、「寄帳」の記述から大宮地区の町々を意味するのは間違いない。上京の西部に位置する西陣から放火した理由はいくつか考えられるが、徹底的な市街地破壊という目的を鑑みれば、当時西風が吹いていたため、それを利用して上京全域を灰燼に帰すことを目指したと考えられる。烏丸町(現在の上記区烏丸通今出川近辺)まで火が寄せてきたのを知った吉田兼見が、御所(土御門内裏)に類火が及べば鴨東の吉田の地に臨幸すべきと信長に進言したことも¹²⁷⁾、焼討が西から東に向かって行われていた傍証といえる(図4)。

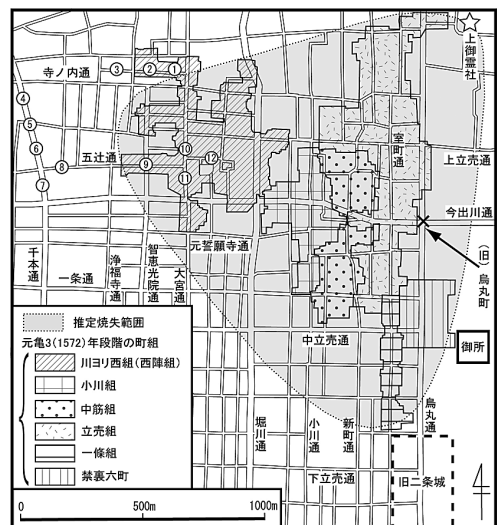


図4 元亀4年の上京焼討範囲推定図

出所：『御湯殿上日記』、『兼見卿記』、『永禄以来年代記』、『日本耶穌会年報』などの記述より筆者作製。

注：○数字は鉦町を表し、表1の番号と対応。

町組の範囲は高橋康夫1983、杉森哲也1983所収地図を参考としたが、一部町名比定に見解の相違があるため、異なる点がある。道路は現在のもの。

逆にいえば、当時風上に位置していたと思われる千本地区など西陣の西部は、焼討の被害が軽微であった可能性が高いとみていいのではないだろうか。そして千本鉾を出す町の全てが、これらの地域に位置するのである。

一方、明治の初めに千本鉾の一つ、③松鉾を出す歓喜町が作成した「富ノ松御鉾御由来書」によれば、松鉾の由来はもともと一條天皇の正暦5年にあり、それが文禄年間（1592～1596）に大破したので現在のものに改造し直し、町の永代守護が認められたという¹²⁸⁾。

一條天皇云々はともかく、文禄年間の改造という伝承は注目に値する。歓喜町は西陣の中で⑥の町々に属するが（図2）、先述の通り、⑥の町々は遅くとも天正19年段階で大宮地区の町々と肩を並べており、その直後に松鉾を改造したという伝承は、まさにこの頃に千本鉾が新調されつつあったことを物語っているのではないだろうか。

戦国期において今宮祭を主導してきた大宮地区や小川地区の町々は、①東千本町や②西千本町を除けば、この時点で焼討からの復興に手間取って鉾を新調する余裕がなく、結果的に千本鉾の台頭を、手をこまねいて見るよりほかはなかったのではないだろうか。17世紀の江戸期に入り、復興を遂げた大宮地区の町は京鉾を新調して千本鉾に対抗したが、いったん確立した格式の優位は容易に覆せるものではなく、幾度かの争論を経つつ¹²⁹⁾、そのまま後世に至ったと推定しうる。

おそらく16世紀後半の安土桃山期における千本鉾の登場とは、今宮祭をめぐって成立していた既存の空間構造（大宮・小川地区のその他氏子区域に対する優位）に、上京焼討という急激な「地殻変動」がおきた末に生じた、異例の出来事であったろう。しかしこの出来事の意義は、その後に長く引き継がれる、新たな祭礼時の空間構造（千本鉾を出す町の京鉾を出す町などに対する優位）を確立させたことにありと思われる。もちろん、そ

の後の今宮祭でも既存の空間構造は維持されたゆえに、双方の空間構造は矛盾を含んだまま並存することになったと考えられる。

以上の結論として、祭礼時に顕現する空間構造の特徴とは、第一に過去において現実であった空間（今ある現実の空間も含む）のあり方や出来事を反映していること、第二にそれゆえ時として矛盾をはらんだ重層性を有していることなどが指摘できよう。

VI. おわりに

本稿では、京都上京の西陣などで執り行われた今宮祭を対象に、氏子区域の市街地形成と関連づけながら、中世後期におけるその変遷を復原した。これによって、従来は研究が皆無であった中世上京の都市祭礼研究に先鞭をつけられたのではないだろうか。

加えて歴史地理学の立場から、近世の祭礼時においては、過去の現実を反映して、時に矛盾をはらむ重層的な空間構造が顕現することを指摘し、それらが中世から近世にかけて形成されてゆく過程の一端を明らかにした。これらは祭礼を担う一般の人々に伝承された、過去の空間に対する地理的認識の重層性を示すものとも考えられ、それゆえ今ある現実の空間との関係などを考察していくことによって、過去にあった空間のあり方の解明に多大な貢献が期待できよう。

一方で残された課題も多い。第一に、改めて近世の祭礼時における空間構造の詳細な検討が必要である。例えば維持運営を独占する西陣古町とその他氏子区域との間でいかなる協力・対抗関係が現れるのか、小川地区はなぜ維持運営から排除されたのかといった問題は残されたままである¹³⁰⁾。第二に、中近世の京都における日常（ケ）の空間構造との関連の考察であり、例えば惣町ー町組ー町といった自治ないし行政末端組織によって構成された空間構造と祭礼時のそれとの相互関係の解明などが求められる。第三に、他社の祭

礼・氏子区域との比較考察なども必要であろう。

以上のような祭礼(ハレ)と日常(ケ)のそれぞれにおいて顕現する空間構造、およびそれらの関係を解明・整理し、全体を見渡せるような体系の構築を通じて、新たな中近世の都市像が現れてくるのではないだろうか。

(立命館大学文学研究科・院生)

〔付記〕

本稿の内容は、京都民俗学会第27回年次研究大会(2008年12月、佛教大学)にて発表した。また、本稿の作成にあたっては、高橋康夫先生、村山弘太郎氏、小田切康彦氏、立命館大学地理学教室の諸先生方にご指導・ご教示を賜りました。ここに記して深く感謝の意を表します。なお、本稿は文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」および「歴史都市を守る「文化遺産防災学」推進拠点」(ともに立命館大学)の成果の一部である。

〔注〕

- 1) 五島邦治「平安京の祭礼と都市の成熟」(五島邦治『京都 町共同体成立史の研究』, 岩田書院, 2004), 61~87頁(初出は1987)。
- 2) 黒田一充「京都のまつりと氏子区域」(黒田一充『祭祀空間の伝統と機能』, 清文堂出版, 2004), 91~167頁(初出は1989)。
- 3) 福原敏男「御旅所「政所・大政所」考」(福原敏男『祭礼文化史の研究』, 法政大学出版局, 1995), 3~79頁(初出は1993)。
- 4) 岡田荘司「平安京中の祭礼・御旅所祭祀」(岡田荘司『平安時代の国家と祭祀』, 続群書類従完成会, 1994), 440~499頁。
- 5) ①近藤喜博「稲荷御旅所とその伝承—稲荷信仰の研究(三)」, 国学院雑誌59-7, 1958, 13~22頁, ②近藤喜博「稲荷祭—稲荷信仰の研究(四)」, 国学院雑誌59-8, 1958, 7~18頁。
- 6) ①関口 力「稲荷祭と市塵商人」(古代学協会編『後期摂関時代史の研究』, 吉川弘文館, 1990), 461~480頁, ②関口 力「平安時代の稲荷祭と七条大路」, 朱35, 1991, 2~10頁。
- 7) 松原誠司「旅所祭祀成立に関する一考察—松尾社と西七条—」, 国史学140, 1990, 35~67頁。
- 8) 片平博文「歴史時代の災害と稲荷祭」, 朱50, 2007, 136~154頁。
- 9) 林屋辰三郎「祇園祭について」(民科京都支部歴史部会製作『祇園祭』, 東京大学出版会, 1953), 59~96頁など。
- 10) ①脇田晴子「中世の祇園会—その成立と変質—」, 芸能史研究4, 1964, 11~28頁, ②脇田晴子『中世京都と祇園祭—疫神と都市の生活』, 中央公論新社, 1999。
- 11) 瀬田勝哉「中世の祇園御霊会—大政所御旅所と馬上役制」(瀬田勝哉『洛中洛外の群像—失われた中世京都へ』, 平凡社, 1994), 223~288頁(初出は1979)。
- 12) 川嶋將生「天文期の町と祇園会」(川嶋將生『中世京都文化の周縁』, 思文閣出版, 1992), 54~65頁(初出は1974)。
- 13) ①河内将芳『中世京都の都市と宗教』, 思文閣出版, 2006, ②河内将芳「中世の祭礼空間と都市空間—祇園会神輿渡御と御旅所を素材に一」(高橋康夫編『中世のなかの「京都」—中世都市研究12』, 新人物往来社, 2006), 201~218頁, ③河内将芳『祇園祭と戦国京都』, 角川学芸出版, 2007など。
- 14) ①山路興造「祇園御霊会の芸能—馬長童・久世舞車・羯鼓稚児—」, 芸能史研究94, 1986, 15~29頁, ②山路興造「祇園囃子の源流と変遷」(祇園祭山鉦連合会編『講座祇園囃子』, 祇園祭山鉦連合会, 1988), 19~67頁など。
- 15) 亀井若菜「サントリー美術館蔵『日吉祭礼・祇園祭礼図屏風』の制作意図—京都と近江を見る眼差し—」, 国華1238, 1998, 3~16頁。
- 16) 小島鉦作「京都五条以南の稲荷社祭礼敷地役と東大寺—祭礼敷地役に関する十通の東大寺文書を中心として—」, 朱16, 1974, 16~34頁。
- 17) 宇津 純「中世における稲荷神社とその祭

- 礼課役一「馬上役」を中心として一」（桜井徳太郎編『日本宗教の複合的構造』，弘文堂，1978），275～293頁など。
- 18) 馬田綾子「稲荷祭礼役をめぐって」（梅花女子大学紀要委員会編『梅花女子大学開学十五周年記念論文集』，梅花女子大学，1980），231～261頁。
 - 19) 橋本初子「『東寺執行日記』にみる中世の稲荷祭礼について」，朱41，1998，97～114頁。
 - 20) 三枝暁子「北野祭と室町幕府」（五味文彦・菊地大樹編『中世の寺院と都市・権力』，山川出版社，2007），159～193頁。
 - 21) 前掲13) ②。
 - 22) ①山村亜希「中世都市の空間構造と空間認識」（仁木宏編『都市一前近代都市論の射程』，青木書店，2002），157～177頁，②山村亜希『中世都市の空間構造』，吉川弘文館，2009。
 - 23) 前掲22) ②21頁。
 - 24) 例えば久留島浩「祭礼の空間構造」（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ空間』，東京大学出版会，1989），107～130頁など。
 - 25) この問題は後述する別稿でも再論したい。
 - 26) 祭礼におけるこれらの問題を，歴史地理学の立場から論じた研究として，渡辺康代「宇都宮明神の「付祭り」にみる宇都宮町人町の変容」，歴史地理学208，2002，25～44頁がある。
 - 27) 山田邦和「中世京都都市研究の課題と展望一「中世都市研究会二〇〇五 京都大会」の総括と論点提示一」（高橋康夫編『中世のなかの「京都」一中世都市研究12』，新人物往来社，2006），257～259頁。
 - 28) 河内将芳『中世京都の民衆と社会』，思文閣出版，2000，10頁など。
 - 29) 五島邦治「郊外の御霊会」（五島邦治『京都町共同体成立史の研究』，岩田書院，2004），89～116頁（初出は1992）。
 - 30) 坂本博司「今宮祭と西陣」，芸能史研究71，1981，56～69頁。
 - 31) 村山弘太郎「近世の今宮祭と巡幸路」，京都市民俗23，2006，123～142頁。
 - 32) 小林丈広「今宮神事と蓮台野村」，京都市史編さん通信243，1993，1～4頁。
 - 33) なお，今宮神社摂社である疫神社のやすい祭の研究は，河音能平「ヤスライハナの成立」（河音能平『中世封建社会の首都と農村』，東京大学出版会，1984），55～123頁がある。
 - 34) ①足利健亮「上京区概説・自然と景観」（京都市編『史料京都の歴史 第7巻 上京区』，平凡社，1980），8～16頁，②足利健亮『中近世都市の歴史地理』，地人書房，1984。
 - 35) 高橋康夫『京都中世都市史研究』，思文閣出版，1983など。
 - 36) 杉森哲也「近世京都町組発展に関する一考察一上京・西陣組を例として一」，日本史研究254，1983，30～51頁。
 - 37) 『日本紀略』，正暦5年6月27日条および長保3年5月9日条など。本稿では，紙幅の関係上，原則として史料所収書籍の書誌情報は省略する。
 - 38) 『神祇官年中行事』（『群書類従』所収）。なお，正元元（1259）年の祭には，院庁より馬長が調進されている（『百鍊抄』，正元元年5月9日条）。
 - 39) 小松茂美編『日本絵巻大成8年中行事絵巻』，中央公論社，1977，60～61頁。
 - 40) 前掲29)。
 - 41) 『師守記』，貞治6年5月7日条に「今日紫野今宮祭，神輿迎口」とある。
 - 42) 『康富記』，応永8年5月9日条。ただし，この日新たに御旅所とされたのは「近衛西洞院獄門内」（現上京区出水通西洞院）であり，後の氏子区域とは離れた地域である。「獄門内」に設けられたことも異例であり，筆者の中原康富自身も「不審々々」としてのように理解できない点が多い。確実にいえるのは，当時の御旅所が戦乱による影響などで転々としていたということであろう（前掲4）486頁）。
 - 43) 岩生成一監修『京都御役所向大概覚書』下巻，清文堂出版，1973，19～29頁。
 - 44) 前掲43) 上巻，213頁。
 - 45) 『占出山町文書』（『史料京都の歴史』所収）。
 - 46) 西陣の歴史については高橋康夫「西陣の成立」（前掲35）），302～342頁などが詳しい。

- 47) 前掲36)。
- 48) 『立入宗継文書』(『大日本史料』所収)。
- 49) とともに『古久保家文書』。
- 50) 西陣出身の桂昌院は、元禄7(1694)年に社領百石を寄進するなど今宮社の興隆につとめた(『徳川実紀』, 元禄7年11月9日条など)。
- 51) 『舜旧記』, 慶長12年5月15日条および『泰重卿記』, 元和元(1615)年5月15日条。
- 52) 前掲30) 64~67頁および31) 138~139頁。「西陣旧記録」には、鉾町12, 寄町6, 御旅所・御供所の所在町3などが含まれておらず、これらは特別な町として行事町の義務を免除されていた。
- 53) 前掲43) 下巻, 20頁。
- 54) 大阪女子大学近世文学研究会編『日次紀事本文と索引』, 前田書店, 1982, 216頁。
- 55) 『誓願寺文書』(『史料京都の歴史』所収)。近世の小川地区は34町で小川組を形成していた(図2)。
- 56) 京都市編『京都の歴史5 近世の展開』, 学芸書林, 1972, 359頁。
- 57) 文化3(1806)年刻成の『諸国図会年中行事大成』参照。
- 58) 剣鉾の詳細については、京都市社会教育総合センター・京都市社会教育振興財団編『京の祭の遺宝―剣鉾の伝統展』, 京都市社会教育振興財団, 1986などを参照。
- 59) ①前掲30) 58~59・62~64頁および②川嶋將生「今宮神社」(谷川健一編『日本の神々―神社と聖地 第五巻 山城・近江』, 白水社, 1986), 63頁。
- 60) 今宮神社社務所編『今宮神社由緒略記』, 今宮神社社務所, 2006, 13頁。実際に京鉾の一つである⑩葵鉾には、「元禄七年甲戌五月吉日」の紀年銘が残る(前掲58) 51頁)。
- 61) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第11巻』, 臨川書店, 1974, 425頁。
- 62) 前掲30) 63・69頁。
- 63) 『言継卿記』, 天文19年7月16日条。
- 64) 前掲31) 139~140頁。
- 65) 中世後期以降は、本来氏族一統が共同で祀った氏神と、自分の生まれた土地の神である産土神とが同一視されており、本稿でも同じ意味で用いる。氏神・氏子概念の変容過程については、萩原龍夫『中世祭祀組織の研究』, 吉川弘文館, 1962, 413~452頁を参照。
- 66) 前掲11) 275~276頁など。
- 67) 下御霊神社編『下御霊神社誌』, 下御霊神社, 1907, 42丁。
- 68) 『続群書類従 第三輯下 神祇部』, 続群書類従完成会, 1957, 686~687頁。
- 69) 前掲65) 442~443頁。
- 70) 『蔭涼軒日録』, 長享2年3月23日条。
- 71) 『御産所日記』(『群書類従』所収)。
- 72) 『建内記』, 嘉吉元(1441)年6月24日条。
- 73) 『親元日記』, 寛正6年11月3日・23日条。
- 74) 前掲65) 416~420頁など。
- 75) 『十輪院内府記』, 文明17年5月9日条。
- 76) 『北野社家日記』, 長享3年5月10日・12日条。
- 77) 北野神社社務所編『北野誌 首巻』, 国学院大学出版部, 1909, 86~88頁。なお、現在巡幸が行われる北野天満宮瑞饋祭は、慶長12(1607)年に神輿が造営されたという。
- 78) 『長興宿禰記』, 文明7年2月20日条。なお、この時に焼失したのが「仮社」であったことについて、川嶋は「おそらく当社が応仁の乱の被害をうけ、ために仮社を建てていたことを伝えるものであろう」としている(前掲59) ②60頁)。
- 79) 『群書類従 第二輯 神祇部』, 続群書類従完成会, 1987, 358~378頁。
- 80) 『今宮神社文書』。ただし、本稿では幕府の神社政策の傾向をつかむために『神馬引付』所収の記事に限定した。
- 81) 『蔭涼軒日録』, 長享元年9月28日条。なお、今宮社重視策の背後に、何らかの政治的な思惑や経済的な権益があったのかどうかは不明であり、今後の課題としたい。
- 82) 前掲13) ①125~130頁および前掲13) ③76~96頁。なお、室町期から幕府と祇園会とは深い関係にあった。これについては前掲13) の各論考などを参照。
- 83) 『宣胤卿記』, 『後法興院記』, 『実隆公記』など。
- 84) 前掲1) および11) など。

- 85) 『親長卿記』, 明応6年5月7日・9日条。
- 86) 『実隆公記』, 永正7年5月7日条。
- 87) 『親俊日記』, 天文7年5月7日条。
- 88) 『言繼卿記』, 永禄10年5月9日条。
- 89) 『永禄以来年代記』, 元亀3年5月9日条。
- 90) 『兼見卿記』, 天正11年5月9日条。
- 91) 『時慶記』, 天正15年5月9日条。
- 92) 碓井小三郎『京都坊目誌』(新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第19巻』, 臨川書店, 1968, 37頁)。なお, 現在の御旅所は文禄2(1593)年に豊臣秀次によって整備された(『時慶記』, 文禄2年5月9日条)。
- 93) 五島は, 上京の今宮祭や御霊祭などでは, 「遅くとも南北朝時代以降, 南部と並んで敷地役という祭礼方法が定められた」としているが(五島邦治「上京一条小川界限」(五島邦治『京都 町共同体成立史の研究』, 岩田書院, 2004), 279頁(初出は1999)), その根拠は明らかではない。
- 94) 前掲85)。
- 95) 前掲13) ③155~161頁など。
- 96) 後述する大舎人座の動向も参照。なお, 管見の限り, 今宮社にかかわる神人の記録はきわめて少ない。その実態解明は今後の課題としたい。
- 97) 前掲90)。
- 98) 仁木宏『空間・公・共同体』, 青木書店, 1997など。
- 99) 『看聞御記』, 永享8(1436)年, 同9年, 同10年の各6月14日条など。
- 100) ①八坂神社社務所編『増補八坂神社文書上』, 臨川書店, 1994, 230~235頁, ②八坂神社社務所編『八坂神社記録 上』, 八坂神社社務所, 1923, 760・764頁。
- 101) 前掲10) ②178頁。
- 102) 年不詳6月14日付「室町幕府奉行連署奉書案」(前掲100) ①254頁)。この文書が明応9年のものであったことは, 前掲13) ①53~54頁による。
- 103) 前掲13) ③177頁。
- 104) 『小西家文書』(『史料京都の歴史』所収)。
- 105) 当時の大宮地区の状況は前掲46) が, 小川地区の状況は高橋康夫「水上空間」(高橋康夫『洛中洛外一環境文化の中世史』, 平凡社, 1988), 101~133頁や前掲93) が詳しい。
- 106) 『康富記』, 文安6年4月13日条。
- 107) 小笠原恭子『都市と劇場—中近世の鎮魂・遊楽・権力—』, 平凡社, 1992, 14・46頁。
- 108) 『後法興院記』, 文正元年4月16日条。
- 109) 『薩戒記』, 応永31年8月22日条。
- 110) 桑山浩然校訂『室町幕府引付史料集成』, 近藤出版社, 1985-1986所収の「錢主賦引付」, 「徳政賦引付」など。
- 111) 脇田晴子「徳政一揆の背景—天文十五年を中心として—」(脇田晴子『日本中世都市論』, 東京大学出版会, 1981), 304~318頁(初出は1970)。
- 112) 『大報恩寺文書』および『誓願寺文書』(『室町幕府文書集成』所収)。
- 113) 『北野天満宮文書』(『史料京都の歴史』所収)。
- 114) 仁木宏「中世後期京都の都市空間復原の試み」(金田章裕編『平安京—京都 都市図と都市構造』, 京都大学学術出版会, 2007), 183~196頁など。
- 115) 『康富記』, 応永29年5月14日条。
- 116) 前掲59) ②61頁。
- 117) 尾形仂・小林洋次郎編『近世前期歳時記 十三種本文集成並びに総合索引』, 勉誠社, 1981, 190頁。
- 118) その他の史料からも, 室町・戦国期の御霊祭では鉾が必須であった。ただし, それらが近世以降の鉾と同じものであったかどうかは別問題である。
- 119) 室町期の御霊祭では鉾が50本余りも出たというが(『康富記』, 文安元年8月18日条など), 近世以降の鉾はきわめて高価な祭具であり, 当時これほどの本数の鉾が鉾と同じであったとは思えない。近世鉾の起源については, 別途稿を改めて論じたい。なお, この問題は河内によって提起されている, 祇園会の「山鉾と町のあり方をこれまでのように室町期から一体のものとしてみてきた姿勢に修正をせまる」(前掲13) ①75頁) 議論とも関係しよう。
- 120) 『御湯殿上日記』, 元亀4年4月4日条。
- 121) 『兼見卿記』, 元亀4年4月4日条。
- 122) 土本俊和「陣取放火と地子免除—織田期京

都上京における寺社本所領の解体過程」, 日本建築学会計画系論文集495, 1997, 239～246頁。

123)『永禄以来年代記』, 元亀4年7月20日条。

124)『続史愚抄』, 天正3年8月18日条

125)『兼見卿記』, 天正7年5月7日条。

126)前掲121) および『永禄以来年代記』, 元亀

4年4月3日条。

127)前掲121)。

128)『歛喜町文書』(前掲30) 62頁)。

129)近世西陣町方文書のいくつかに, 千本鉾と京鉾の対立を示す内容が残されている。

130)これらについては, 前掲25)の問題とあわせて別稿を準備中である。

Changes in Imamiya-matsuri Festival and its Kamigyo Parish in the Late Medieval Kyoto: A Study on the Spatial Structures Appearing at the Time of the Festival

HONDA Kenichi

Kyoto has long celebrated various city festivals. As for studies on medieval festivals, many have been conducted on festivals held in Shimogyo, the southern half of the city, such as Gion-e Festival. Yet previous studies do not focus on festivals held in Kamigyo, the northern half, such as Imamiya-matsuri Festival. Focusing on Imamiya Festival, this paper not only demonstrates how it changed through late medieval times, but also examines the spatial structures that appeared at the time of the festival.

Imamiya-matsuri is a festival of the Imamiya Shinto Shrine in Kamigyo parish (*ujiko-kuiki*). This research reveals that at the time of the festival, there appeared three rather particular spatial structures within the parish. First of all, the district called Nishijin-kocho in the parish monopolized management of the festival. Secondly, a *mikoshi* (portable shrine) was carried around, especially in both the Omiya area of Nishijin-kocho and the Ogawa area nearby. Last, neighborhoods (*machi*) of Nishijin-kocho served festival tools called *kenhoko*. Among the two kinds of *kenhoko*, *Senbon-hoko* possessed by neighborhoods of the Senbon area were classified as superior to *Kyo-hoko* possessed by neighborhoods of Omiya area. These spatial structures often contradicted each other, which seemed to be a result of various historical incidents, accumulating in a multi-layered way.

Spatial structures that appear at the time of festival reveal the multi-layeredness of citizens' spatial perception of space in the past. Consideration of their structural relationship to the actual space can contribute greatly to research on space in the past.

Key words: Imamiya-matsuri festival, late medieval times, Kamigyo in Kyoto, parish (*ujiko-kuiki*), spatial structure